



繪本甲越軍記二編

八



2258
20



門八達 93
踊 228
卷 20



繪本甲越軍記二編卷之八

二編

目録

樹旗於椽尾事

法將景虎と勅と椽尾と旗と事

椽尾城合戦一事

本條亦在若而原馬場北家椽尾城と戦

長尾城亦与合戦一事

柿河下合戦一事

米山合戦一事

長尾景虎智若事

繪本甲越軍記二編卷之八

本山合戦の圖

長尾景虎本山寺陣すす奉

長尾武元と付死す奉

井の丸合戦の圖

長尾晴景生害す奉

府内城落すの圖

長尾景虎と小幡信俊と勢死す奉

長尾景虎信俊農人への小幡信俊の圖

長尾景虎と小幡信俊の圖



繪本甲斐軍記 卷八

諸將勲賞景虎 樹旗於後尾事



之仁去々殷虚一ニ老帰一々周樹より長尾晴景は并平の

勢と集り多しを遂に長尾耕祐が政景上田修理を

景國の將相撰守景親泉沢河内も唐湯た馬助比頼新塔大湯

魂若き大河渡河も松本大隅と其勢二義又千修務府内の城り

雅集る古志騎の秀景館中神去清景も高梨橋原も

も新津美二神也の神又神山村若狭守大慈徳也も奇橋中好も竹

撰也河も比新大浦の酒造中守小幡丹後も栗田因幡加地安景も

也於修理也松本常陸も木の流拍り景虎が勇果も

但も後世に換尾の景虎も従ひも其の景虎清と落し父も素也

繪本甲斐軍記 卷八



本山合戦の圖

長尾景虎原山寺陣の事

長尾武虎と付託の事

井の丸合戦の圖

長尾晴景生害の事

府内城落去の圖

長尾景虎原山寺陣の事

長尾景虎原山寺陣の事

長尾景虎原山寺陣の事

新本甲斐軍記 二編 卷之六

第

之に去る殿虚一ニ老婦一々周撫あり長尾晴景は井の丸の

勢と集り多し是は長尾耕斎の政景上回復理を

景國の相換守景親泉以河内も唐湯た馬助は頼朝塔大湯

魂流る大河渡河も松奉大隅と詰其勢二弟五千修務村内の城より

孫集る古志驢のも秀景館内神云清景も高梨播磨の事

新津美二部並の神又神山村若狭守大慈徳也奇藤中將の行

探参河も此新た清の清重中守小條丹後も柴田因幡加地安景の

急於修理危松京常陸公木の流る景虎が勇畧也

復又後世に換尾の景虎は從ひて景虎は落し父の素之臣



會本甲越軍記二編卷八



年久
 正馬
 尾
 圖

西

法

其の唐の太宗の弟は建武中身え吉と教て天下を傳ふ
 て皆賢君の弟あり何の憚り又ういふと早くは親と奉
 ね一月は勸るる所へ庭形上校兵庫頭殿より神槍を
 梅尾は看く早く親兵と奉べと由中筋ありるまは景
 と水へさへ其用をあるべとく嫌神と依理り一宮を
 とくく鐵炮の玉をを用えあるは鐵炮は去る天文十二
 島へ西洋國選巴州の舟ありて更島と清の其舟あり
 獻は清遠の舟に小の的を之鐵に作りたる大受の
 又茶とびく銀の彈丸をのぞき又百より下るる中
 時光もそのは火を二箇と突ゆる其熱を試るは中
 走らばけけ根来の法作松の坊と云く昔とて同て

旗 旗

會天日越軍巴二編卷八

旗

法

其の唐の太宗の弟は建武中身え吉と教て天下を傳ふ
 て皆賢君の弟あり何の憚り又ういふと早くは親と奉
 ね一月は勸るる所へ庭形上校兵庫頭殿より神槍を
 梅尾は看く早く親兵と奉べと由中筋ありるまは景
 と水へさへ其用をあるべとく嫌神と依理り一宮を
 とくく鐵炮の玉をを用えあるは鐵炮は去る天文十二
 島へ西洋國選巴州の舟ありて更島と清の其舟あり
 獻は清遠の舟に小の的を之鐵に作りたる大受の
 又茶とびく銀の彈丸をのぞき又百より下るる中
 時光もそのは火を二箇と突ゆる其熱を試るは中
 走らばけけ根来の法作松の坊と云く昔とて同て

隅の關は下向一色と爲る所共なり其後浪の命はく多く作らるる
多きども意南蛮國の制はり者多くは但し其後金を産する
之に浪の工自書人法と爲るけ長と作るもたあらざる
即ち南蠻國の制も亦も此の更なる一是るある鐵炮より根元の
松の坊是と心條は傳へるを甲斐の武田が如く致すとすけは
又後の中京虎母の國へ竊に松本を助才助作互も又命はく
甲斐は遣し根元は致し是れと爲るけ國はは傳へる

梅尾城合戦の事

新て湖濱國之分は別は法はぬるる有様一時京が智略は二
梅尾は乃ひは進へるは梅尾城ありと大文十六年日長
尾原に古河門時宗討死と知陣ある是らう先上向依理は其河

敵

同ち松本大隈守大隈義隆は六十千修治は先陣とす時宗は二
日先達く下城濱に着し一はく人馬の息と休む後陣の着せしる
内は城と赤らんとあると梅尾の味は相集る其勢は互に
聲く声く攻まる城の中らも鐵炮と雨の如く致ちて防ぎをせ
はせしる負ふと一はく勇はくするも夫石を役しと攻
むる景虎は擲はありし故の勅許を見し種はゆひし敵軍は今
の内は引へしはとけはとけは必し打をいせを各々根の用をせし
と下知あるは佐々木孫兵衛も頭と振り今日果つる是れ敵のい
う其勢は引へしはのりや其上故の殺ま十分は又是れい
陣と固まるは兵軍あるは其勢はさし攻むる故の殺まはすは
あつて明日合戦ありと諒むは天京虎はあつても引へしは

攻
敵

采

佐天本社の軍不審くい思へも景虎の方牛面びと平次又本
 色に用志を懸く下知を益々考へいさう承よおるまど自とも
 ぶ以攻まきと城中の防ぎ堅くはばけ仕出さる可もあし
 引退さく陣と大船と夥しく枝ま清陣の加う陣と示と
 早來半よりいりまんと思へも景虎故勢とよしく見様り向
 ぬの旗と青龍と一舟はおま城門をさつて用と啼と喚ひい
 射くまとい業は遠いばあひの勢ハ船と増く陣勢と示一軍
 勢大ま引さうく一軍もいべ一城も及ばむと前まうと敗
 き入景虎來幣と振軍よの傍るををわやくと疾風の
 く退さる其勢ハあり難く大船龍本も勇士伴和志と海を
 きの纒と看一上田修理が老臣府着河内い押く船の相繼とる

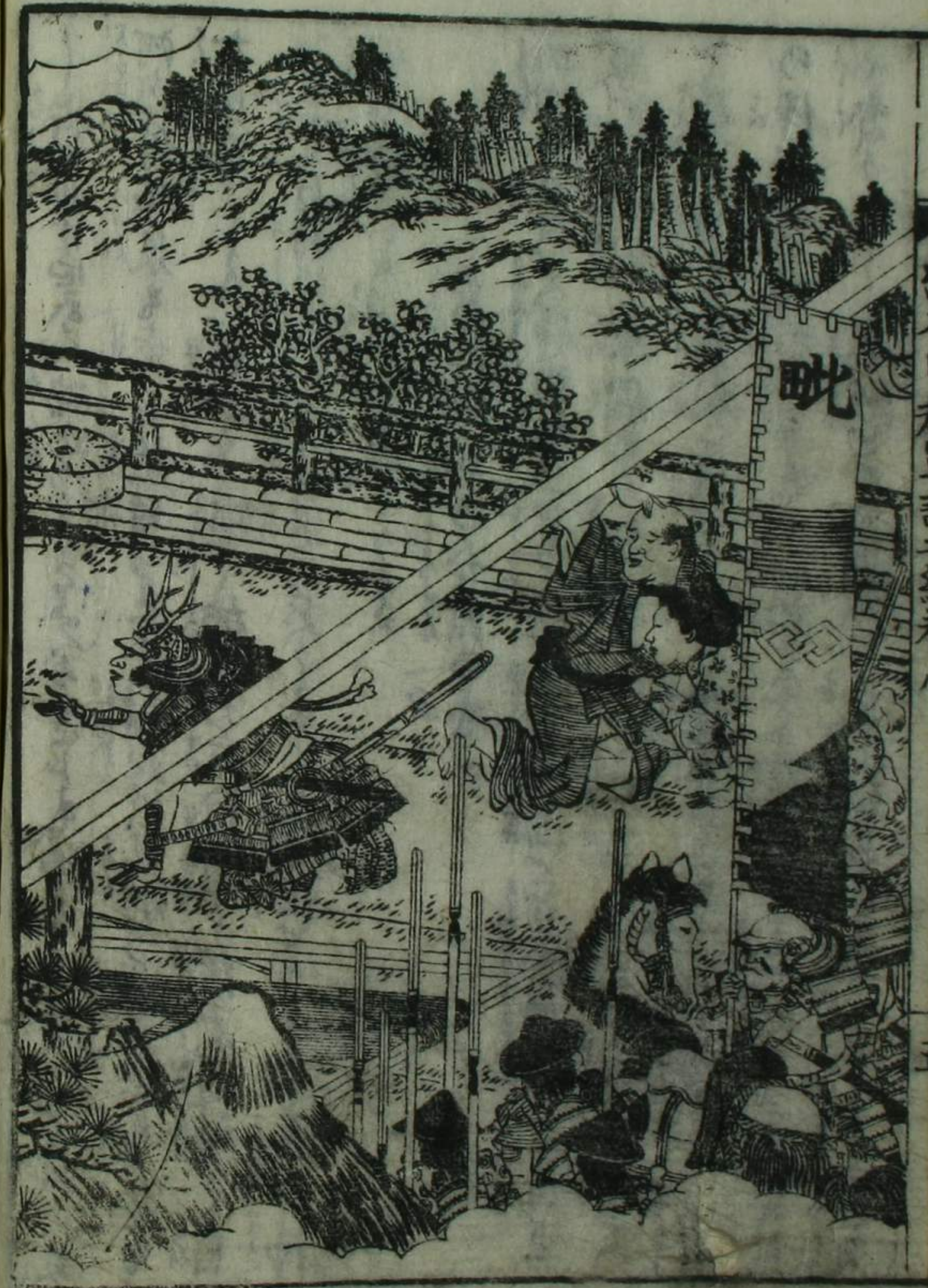
元

4
本

一止の者十日入踏歩くくさくも流く味方なるか母
 河内伴和泉も竟く捨付くこと射死に其地の勢ハ給長刀とわ
 ち捨命さうくと助く遠く柿崎の方引退く景虎退射く首
 と取支百餘級中は長退あるうすく引退さうく其狀様
 傍の陣と取さるる

長尾輔成ち合戦の事

け討つ河内の大船晴宗の二弟勝と率ひ茶山と打途柿崎の下流よ
 陣を取流おと軍備あると大敗退く迎承りて大船晴宗大
 又營と持さる茶碗と確と流しをさうて見くお流おの大河
 の陣と見く大河も大船おまう後ゆる上へ陣もけ射入る
 くおらうくと各款と見合ると長尾輔成も房京をもとて未明日



寸地も争ひ互に働自由なり是は物別は成るを引返す

柿崎下決合戦の事

大雨連日降流く之日が同互に軍を止め暇を合し居りしに
初めの果しとありし止るを待て棟尾勢下流に押寄せ大物系
虎へ枚系常陸今須田大炊十路對馬小條丹後とた右に從て岡
と作り鐵炮の射浦お敷烟のりうう城邊に在り鐵炮射る
而其精次良志未及夜露未去先はをさうて突合は勝系が勢も
槍先と抄し兩勢互に身命を惜まば務を削つて勢へう幸然矢
作も宋田因幡と柿崎和泉の山をとり府内の大勢へ合戦も
う切りのう突を難きおける是は河内を居た馬助も定を
敗らしとて勇と看せし是と防ぐ新發田尾張と大勢は

お斎藤下野も大勢は流る大に後河もが備は納くうう南
少はあつて美秋入本庄彌本沖新津流二所又百川健彦が
田た京八松本大淵上田依理が備は刻々入死生知はは難き
早山村若狭も同右系亮大勢備前も竹保之河もは流るううり
浪打邊と曰し長尾城並もが備は烈風のし射入鐵炮のま英
さ研ぶ声坤地も今や碎るはは強きも陣互に大花たはむし
定し切合の指方又組討定と去くとと據合なり棟尾の大なる
尾母虎崎は年十八才馬と去き又出しく下初あはは是は後人
流る勇士のううう雷もききるべし一人も備をまると大原の
下く候と候し切なきは勝系勢も申すと曰し防ぎ難く
景虎が下知能く斬殺難捨我の馬是は踏踏し起しもさす

斬りしに勝勢に敵は東西に散るべし
 佐々木は河を帯びて取捨合し縦横を以て突きのまじりて勝勢
 勢始も七割八割と切崩しに討ち者殺すに大なる長尾備前馬と
 一番は近き人ハ法由も討たし負救知す棟尾勢に切崩し
 茶山さし敵走に長尾越前も長尾武蔵守が徳ハ中ハ是を押し
 是後敗れしに日とては討たし大なる法由は勝勢に切崩し
 佐々木は近き人ハ法由も討たし負救知す棟尾勢に切崩し
 引約ハ景虎勢はより一人も後以まじりと返討の果意多り城
 茶山武蔵守のも勢は止しし城ハ近き人ハ是に引返さ茶山さし
 ても引返さし勢が体は目ごましく見へりる

茶山合戦の事

自筆

去程ハ景虎勢ハ厨内勢と追きまじりて破れしに
 下まで追張勢ハより美よりんとするに景虎勢ハ人殺し推止め
 殊外草野ハやん勢ハよりお時辰するは勢ハ息を休め
 馬ハ林と云捨て馬よりりる例も小敵ハ休むるに
 宇佐大膳ハ勢ハより馳来り景虎ハ勢ハより大なる果
 討勢ハより茶山と美よりて敵ハ本途ハ追討するに頭城ハ
 て厨内の城と采取らん其も裏ハあり今武勢ハより大なる
 小敵ハより景虎と諫言ハ景虎ハ胃を枕よりて敵討し
 是ハ本ハ宇佐大膳と奇ち早く打ちまじりと再之より
 虎ハ前後も初め停るに皆ハ大なる果は法由はより大なる
 仕裸也ハ敵と討たし勢と歩肉勝勢厨内ハ城ハ

信濃甲越前地本集巻八

上

新
山
合
我
の
良

會本甲戌軍已二編卷八



會本甲戌軍已二編卷八

國が本勢の味方名も思ふに容易く夷寇は率能く之を其内
 國中の権柄勝素は一味く赤後と流が一人も生か
 の邦の大ききなり其と黒田又舟又極尾の虚と烟の裏の村を
 に世にふるよありて備と備を論る一十分の勝利を授け
 ざるに景虎君が軍の極是非をさすなりと始の勢に支なり
 捷よく見ざるが尉内勢勝よとわが二程兼山の作と執人と
 以景虎むくくと執より早見とせ馬とせ中をよわし尉内
 をも只一息の故を責討其勢のよきなりと尉内の城を押渡せし
 の早捷なりと急な軍勢と探出す其極勢初は倍しとく
 ば法が太は信天へ元末侍はゆる軍勢さるは太は初と出く
 山の作と地登る見より先尉内勢は兼山の決祖と近なり一が

兼勝の太はと徳ありて是景虎法と進よく来る一半途は
 急より故と定りよる下し進中より又と坂中に備と
 とも景虎文は進死くともは勢急進く法勢に觸るる
 引退く一と兼勝が徳を用ひて下をを人トて倍く
 兼勝は故とわくんとするは景虎が勢國と作り織地の前
 一回は徳とあてて久尉内勢大層は百姓人権と
 景虎勢の決地の上を探久しお敵の其まら山谷の
 たり鬼山清原の甘粕二原を兼勝の虎を言し
 物と兼勝は馬とを故と目の下に見く
 肉勢をの勢は海よりありて松本と隅太と上野
 攻より攻下は石と敗るる味方の大軍を退きして

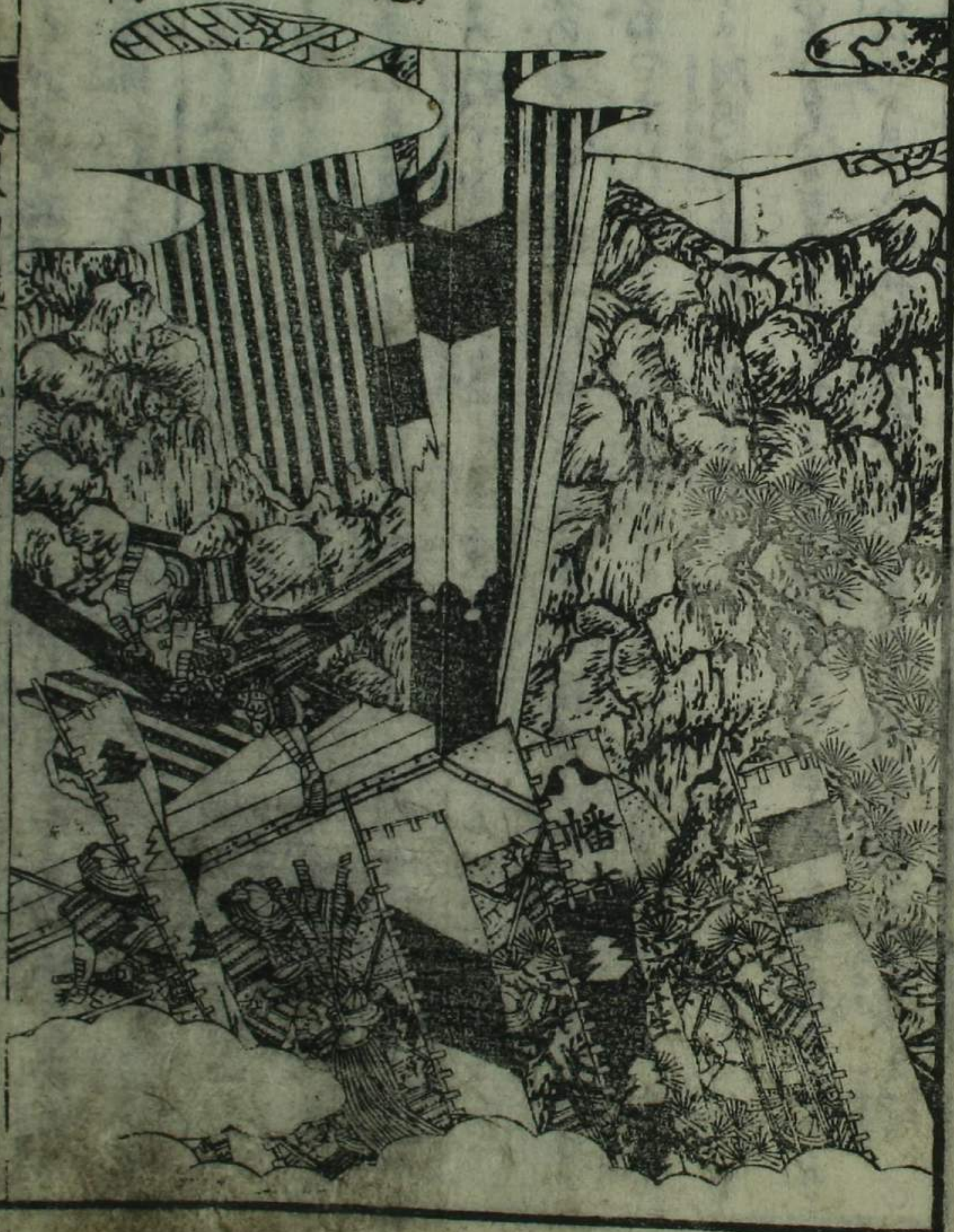
敵

高き一のり足踏の踏をく歩人込迎うう一が山國に間くも無能の
 切取くくけの中あつ其地の板千丈の橋より宗石登まて一
 優くく大御方の大御方と進法より引廻らんすまて後より高
 方の敗走を押付らまて人馬跡がよと進落さま身を陣こけと切
 別り格より落くお守り者救知らず者くは敗走きけ付を居
 城おもも居る一且村内の陣は後より引廻らんすまて大御方
 軍の及よ越くお守り用ひらまてまてお守り不危持利の所へ
 うす固おのるよと進と夫のん幸なるうすと縁と勢と引真一
 上田の城へと引返さるる
 長尾景虎は村内勢と進ま山さるる退よりお守り
 叔も長尾景虎は村内勢と進ま山さるる退よりお守り

又陣と張つ源側と引つて村内と人下してあつ一が
 清とゆぐ其まよか海よとまてまてまてまてまて
 足晴景は進せしと村内と退まゆが脊よ勇まてくい事よ休
 ひ一ぬけ根と晴さんぬけ石と陣取く敵と引んとまて果
 て今日よ引つらつらとまてまてまてまてまてまて
 と落し海に思ひぬく一いりり切と陣取より戦場の地理と考へ
 又思ふよまてまてまてまてまてまてまてまてまて
 横浦よ勇く浦よ又まてまてまてまてまてまてまてまて
 足さる又の橋くまてまてまてまてまてまてまてまて
 首とまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて
 一と君と逃りまてまてまてまてまてまてまてまて

甲越

二の合戦の図



合戦甲越軍記二の巻

五

下



合戦甲越軍記二の巻

十三

是より力とてつゝ武蔵勢強きなりと云々
 分右系と封せしと二百餘騎より討く武蔵と云々
 房少佐威烈し一軍に新發田勢周と崩さ
 之騎より引ぬ武蔵より酒入合火水と云々
 討く武蔵より息と体んと回の備へり
 と作つて討く武蔵より酒入合火水と云々
 村勢粉粒と云々山村右系士率と初
 討く新發田尾張も返一合を接し合
 涉東西に別南少と馳走り討く武蔵
 勢もまた右系より討く武蔵より酒入
 勢右馬助は別新發大勢勢も大河
 勢もまた右系より討く武蔵より酒入

志賀と雲雲の志賀村の行候之河も
 門掃揚和赤馬と云々の有く我ひ
 こころ敗走中にもも河内も亦
 勢もまた右系より討く武蔵より酒入
 降系は長尾晴系に討く武蔵より酒入
 固めんとす武蔵切つて法務
 なる士率少くも武蔵曲輪を打捨
 と云々

長尾晴景生官の事

去後長尾景亮へ破竹の勢と云々
 又取圓今我ハ明日と具敷ハ大前と
 又取圓今我ハ明日と具敷ハ大前と

會本甲越軍記二編卷八



府内城
落去
の圖

會本甲越軍記二編卷八



内は約りては法士木換と定り一扶田大守丸田左衛門右衛門末次助圓忠志
 安らゝ惣右衛門のホと依武に降り或は落失初め楳尾よりついで二万五
 千餘騎と同一が今の僅二千餘騎といふ事なり又も楳尾に
 景虎が法寺一同は岡と仰ぐ攻まる楳内よりも夫を死し大本宿
 投後防ぎざるは是日打ちこむをいひありあぐんて目へくる西本庄
 三ヶ他も山村若狭守小條丹後守松本左衛門須田大次大慈使あるの
 軍よりするまゝに討ち殺しにせしめし冊と破り逆原本と給し城門を攻
 法寺とて法寺一舟に准り先と報はせしと情と極く攻詰り
 城内よりいふと破りてしし作江村出たりしは討ち殺し者數知れ
 び是れ兼貞といふるがふ百川縫者荒川右衛門兼貞小條若狭守
 彌本郎一其弟次郎若狭守城守郎七寸八歩守備約等の勇士は二萬をこへ

城の下のと上りんとを破り城守より詮長刀でひき切拂ひて破り
 鐵炮と糸一をいひてその勇士もを兼貞と傾け夫を破る
 城守は討ちて居るゝ取の山村右衛門つらと地味うけ人のよき兼貞
 山村若狭守が楳尾右衛門村内城の一番守りたる者なりとて夫も
 と破り楳尾と兼貞といふは是れ初とてさる百川荒川右衛門兼貞
 七寸八歩守備城守の兼貞が勇士一同は打ちこむに破りて入
 りて本庄山におもね松本須田大慈の勢へこの丸の城戸は法寺とて
 楳内の防ぎを破りては内を破りては後陣の勇士も早破りて城
 攻入るる軍軍もまゝと奇ち討ちては突貫し城守は二を三日攻め
 一細く城戸を打破して城戸の内は鉄とひき貫き貫き破りては
 是れ入貫しとてこゝろに奈津原若狭守鉄の兼貞はけりては

備前甲越軍記二編卷八

其の意を以てし其子と指教し其方も大の中より生きたる
 内は年五十五は是と見ゆ日因縁を以てし士百姓人悉く
 生きたる其他の士率亦討つ者教かれば其の亦多うりま
 農兵を以てし倭兵と對ひて其の死傷亦及并倭臣
 實は時宗が忠妻を以てし倭臣に徳山右忠門尉初倉徳中系掃部
 とする人城中に居りて其の命を以てし其の明日又死すま
 一飯も食せざれば大は死す其の命を以てし其の村に
 氏未徳山系を見知りて其の命を以てし其の村に
 先より其の社を以てし其の命を以てし其の村に
 其の妻を以てし其の命を以てし其の村に
 と其の命を以てし其の命を以てし其の村に

系と始末の意の遠く迎走り山の上にて遠ゆるる百姓集結し
 地登りまると徳山右忠門尉系掃部と始末の意と擲と殺し年月の
 寛文とを以てし其の命を以てし其の村に
 勢と率を以てし其の命を以てし其の村に
 刀馬と御の兵庫野原の果流が傍りを以てし其の命を以てし其の村に
 尾の家と御法士を以てし其の命を以てし其の村に
 家と御の命を以てし其の命を以てし其の村に
 其の命を以てし其の命を以てし其の村に
 中と岡長尾の家を以てし其の命を以てし其の村に
 心するにわたり其の家を以てし其の命を以てし其の村に
 其の命を以てし其の命を以てし其の村に

甲越

435



會本甲越軍記二編卷八

七二

農民
荷袋
擲穀
圖



會本甲越軍記二編卷八

七二

下子

此軍忠と仰るは法務士年々其員ありて中と云ふは曾祖の
 徳とて先青の城と山村若狭とふゆふ右京亮軍忠と云ふは
 上郡新井の庄苗田之首首井と云ふと稱する其後曾祖は
 本庄兵衛の母を格骨の軍忠傍に射たるとすといふ
 徳賞と仰ひ柿崎和泉と京京新津老一高志に柿と云ふ實測平社
 彌を新野長新野田尾張も長敷大徳徳茶と云ふの首首中野の
 竹腰参河の春朝其の軍切忠多と云ふ新地加國と仰ひ京原辰翁を鉄
 の巻本と仰ひ勇力古今具例と同く云ふ其上法上野と云ふ
 揚つるる景虎の沖也と仰り藤尾の城と云ふ油城と云ふ
 直江津と云ふ年は附山成守兼徳と政見勇老
 田村の村と云ふは幸い其の徳と云ふ

清

繪本甲斐軍記二編卷之八

二行

